

（ 第4回「奈良県男女共同参画県民ミーティング」開催 ）

男女共同参画の推進を図ろうと、1月16日、第4回「奈良県男女共同参画県民ミーティング」（主催：奈良県、奈良県男女共同参画県民会議）が大淀町松垣本の同町文化会館で開催され、約150人が参加した。

最初に、コーディネーターの京都府立大学福祉社会学部の上掛利博教授が、『男女共同参画社会とは、男女が互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる社会』と説明。

続いて『ノルウェーでは1971年から1991年の20年間に、女性が収入を得る仕事をする時間が1日あたり53分増え、家事をする時間が1時間30分減った。それに対して男性は仕事時間が約1時間減り、一方家事時間が23分増えた。その結果として余暇の時間が女性も男性も1時間増えた。余暇を人間らしく活動できる時間と考えれば、女性も男性も幸せになったのでは。また、先進諸国では男性の家事参加が高く、女性が社会進出している国ほど出生率が高くなっている傾向がある』と基調講演を行なった。

活動発表では、大淀町人権教育推進協議会会長の池田洋行さんが、葬儀の際、性別で決まっていた仕事の分担を解消しようと取り組み、最初は女性が遠慮がちだったが、現在は男女の区別なく、女性も帳場に入ったり、テント張りもしている。また、自治会役員に女性の登用を図るように取り組んできたことなど、地域活動の中で男女共同参画にかかわる体験談を紹介した。

「カメラネットワーク21」代表の阪口弘子さんは、平成14年度奈良県女性海外派遣調査研究事業に参加し、訪問したニュージーランドやオーストラリアの事例、平成15年度内閣府男女参画ヤングリーダー会議に出席して感じたことを紹介。

さらに十津川に生まれ育ち、その後大阪で仕事をしてきたが、『人間らしく生きたい』と考えて十津川へUターン。現在は、『女性の視点をもっ

と地域に』を胸に、地元でボランティア活動などに取組んでいることを報告した。

おはなしの会「カンブリア」会員の佐々木淑子さんは、現在取り組んでいる“おはなしの宅急便”活動を通じた男女共同参画や地域の親子とのふれあいを紹介。『相手の立場に立って考えられる子どもたちを育てたい』と抱負を述べた。

西岡農園の西岡英史さんは、2年間のアメリカでの農業研修での体験や、家業の農業を受け継ぎ、日々仕事をしていく中で感じた女性の役割の大きさについて説明。自分が結婚した時に結んだ「家族経営協定」は男女を問わず家族の役割分担を決め、意欲を持って農業に取り組めることを目的としたものと紹介。地元の西吉野村でも協定を結ぶ家庭が増えていることを報告した。

最後に上掛教授はノルウェーの例を参考に、『「人生の質」（クオリティ・オブ・ライフ）を高めるために、地域で暮らす一人ひとりの持つ能力が社会に活かされるような「人間中心の政策」が必要、そのためにも人間の半数を占める女性の能力を社会が活かさない限り、少子高齢社会に安心して暮らせない。今はそういう時代にいることを私たちは自覚する必要がある』と結んだ。

（上田）

※資料提供：奈良県男女共同参画課



第4回「奈良県男女共同参画県民ミーティング」